

ほぼ半世紀前、私は通学する大学生だったが、桐生高校の先輩・同輩を訪ねて、あるいは全学連機関紙『祖国と学問のために』の購読勧誘などで、学生寮（東大・駒場寮）の部屋に入ることがしばしばあった。寮の殆どの部屋の誰かの書棚（大体みかん箱かリンゴ箱）に、青い装丁の岩波・新書版『河上肇 自叙伝』があった。いま私の手元にある岩波文庫版第一冊（1996年10月一刷）の解題によると、その新書版五冊は、52年の6—10月に発行されたものだ。私は、その52年の春、破防法反対闘争と血のメーデーで揺れる学園に入学したのである。だが私はその新書版『自叙伝』を読むことがなかった。多くの人が競って求め読む本は何となく読み損なうという私の性癖の一例である。下関で働くことになった60歳代後半に漸く『自叙伝』を読む。下関市大同僚の山本興治兄が演習で河上肇をとりあげ、岩国に現存する河上肇の生家を訪ねるというゼミ旅行を組織した折に、便乗させて頂いたのが縁である。

河上生家は、いま甥の河上荘吾さんが住む形で、守られている。その荘吾さんが「自叙伝は食べ物のことがいろいろ書いてある本だと言う人が親戚の中にいるんですよ」と語る。たしかに、天皇制ファシズム下の苛酷な話しが綴られる『自叙伝』には食べ物の話しがよく登場する。この点、濟州島蜂起一大虐殺という深刻なテーマの金石範『火山島』（全七巻 文芸春秋刊）にしばしば島独特の食べ物が登場するのに似ている。もっとも、金の場合は強い酒の酔い醒ましに口に運ぶ豚の子宮の刺し身（フェ）といった類のやや恐ろしい料理が描かれているのに対し、河上の場合万人向きの甘いお菓子が出てくることが多い。たとえば「同君は当面の用談を済ますと直ぐ座を立った。その時、夫人の郷里である山口から送って来たのだといって、山口名物の菓子『舌鼓』一箱を土産に置いた。同君はこんな物をさげて来た自分の気分を悠長なもののように感じ、場所柄不似合だと思ったのだろう、何か悪いことでもするように言訳を繰返した。こんな地下にもぐっていながら、あの甘い山口名産の『舌鼓』を口にするのは、私が喜ぶことであるのに相違ないのに、なおかつ気をつかっている友人のデリケートな感覚を、私は余りにも行届き過ぎだもののように感じた。」（文庫版第一冊325頁）ここでいう「同君」とは、戦後に日ソ親善運動に尽力される堀江邑一氏だ。

京大・河上肇のもとで経済学を学んだ堀江氏は、当時、高松高商教授。上掲の河上隠れ家訪問は、私の生年と同様、1933年の正月、河上検挙の四日前の九日だ。堀江もその八月に上海の東亜同文書院構内で香川県特高に検挙され、高商に辞表を出すという展開になる。堀江自身の上掲出会の場面の描写は以下のごとくで「舌鼓」は登場しない。「自分は久々で先生と二人の夕食をすませた後、日が暮れてから辞去したのであるが当時自分は近々支那に向かうことになっており、自分の前途にも何が起こるか分からぬことだし、先生のお身の上こそは明日をも計り得ぬ危険な生涯にいられたこととて、その時の師弟の離別の情は全く言語に現し得ないものがあつた。」（大崎平八郎編集『堀江邑一先生を偲ぶ』75頁）

さてこの「舌鼓」は、山口・湯田温泉の中原中也記念館の斜め向かいにある山陰堂で、今でも製造販売されている。つい先頃まで「舌鼓添へて寒さの見舞かな 満州 風外」といった俳句などを掲載して、戦前に東京、朝鮮、台北などにまで、広く購入者がいたこと分かるピラが添えられていた。新横浜から博多に行かれることがあつたら、途中、小郡で一列車遅らせれば新幹線駅構内売店で（つまり途中下車をせずに）購入できます。是非！（02.06.02）